

西村建築設計事務所シリーズ ①

日本福音ルーテル津田沼教会

『 茶室の精神もてなしの空間, 神の家族の礼拝 』

竣工 1999年12月 所在地 千葉県習志野市津田沼

構造 教会堂 鉄骨造1階建 牧師館 木造2階建

延床面積 265.61 m² (80.3坪)

設計者 西村建築設計事務所 代表 西村晴道

施工者 前田建設工業株式会社

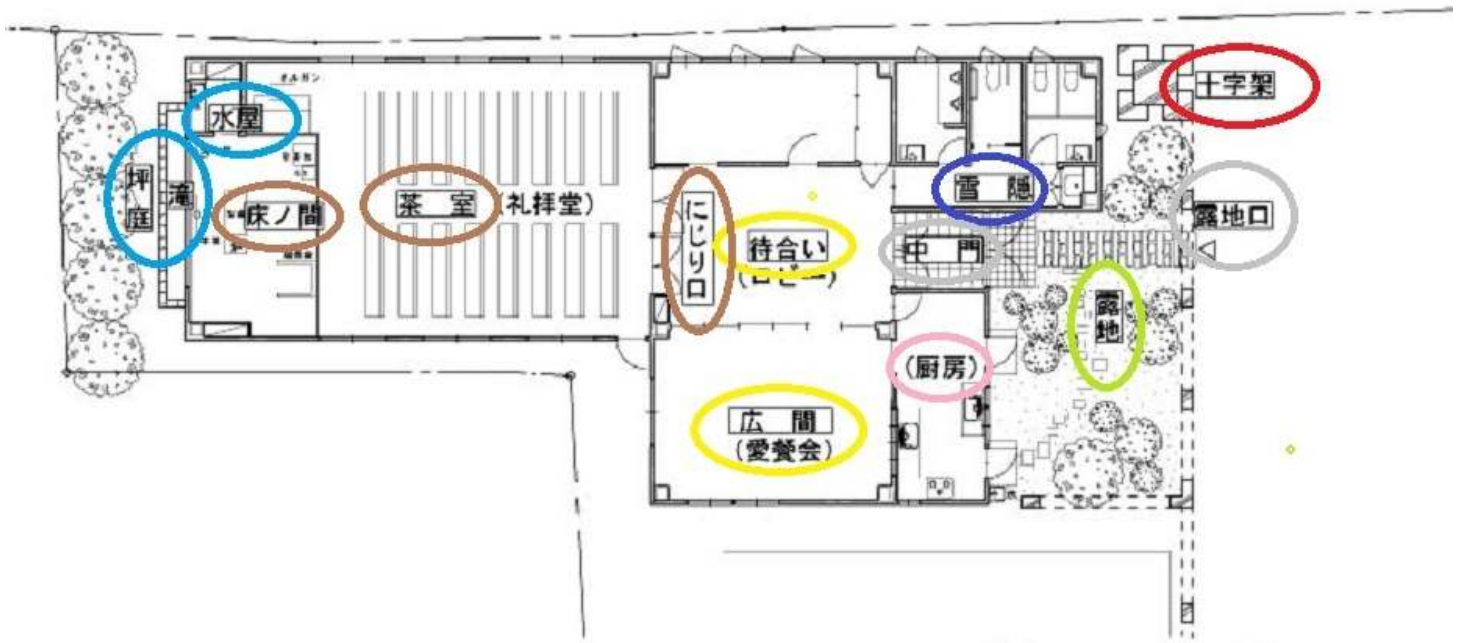


日本福音ルーテル津田沼教会の前身は、1949年に幼稚園から始まった中山教会です。

建築に当たっては、奥に細く突き出た敷地にどのように配置するかが、いちばんのポイントでした。そこで入り口から心を神に向けるためのほどよい長さが取れ、落ち着いた場所として、奥まった位置に礼拝堂を設け、敷地の形状を生かしました。前面に駐車場を広くとり、牧師館は教会堂と区分して別の建物としました。

幹線道路沿いの高台に、ずっとそびえる十字架モニュメントは、遠くからも教会だとわかります。津田沼教会の建物は、茶室の精神を取り入れたもてなしの空間をイメージしました。

千利休は、妻と娘がキリシタンであることや、当時来日していた宣教師たちと会う機会も多く、キリシタン大名高山右近との密接な関係もあることから、彼自身キリシタンではないか、利休（りきゅう）という名前もルーク（Luke）からきているのではという説もあります。



礼拝堂で説教と聖礼典（茶室で茶事）

- ① コンクリート内放しのゲート露地口は外と内の区切りです。そして露地（アプローチ）を通り、中門（ちゅうもん）としての玄関風除室を通り、待合（ロビー）に入ります。亭主の迎え、受付があり、心を整えます。
- ② 右手に清潔にととのえられた雪隠（トイレ）を設け、左手に愛餐会が催される場所を設けました。
- ③ 亭主（キリスト）に招かれた神の家族は、貴人口（きにんぐち）ドアから礼拝堂に入ります。礼拝堂は天井の高さ6.5mの平天井に、スイスの小さい町で見た教会（※別記参照）の落ち着いた雰囲気をもたせました。正面に床の間としての聖壇を設け、床の間の掛け軸は、友人の西村陽平（造形作家、前日本女子大学教授）作のステンドグラス、十字架、聖壇布を見ます。正面下窓から見える坪庭には水のカーテンのような小さい滝をつくり、説教台、聖書台、洗礼盤を置きました。
- ④ キリストとともに神の家族の礼拝（茶事）が始まります。リードオルガンの音色がシンプルな小空間に、やわらかに響きます。



路地口



茶室



床の間

西村陽平作（造形作家、前日本女子大学教授）の十字架、聖壇布、ステンドグラス。



礼拝堂は茶室と共通する空間

茶室は建築として日本独特の造形であり、キリスト教の礼拝堂とは関係ないかと思われるかもしれませんが、茶道とキリスト教との関わりを見ると、いくつかの共通点が見られます。

茶室に入るには、にじり口を通らなければならない。利休考案のにじり口は、「狭き門より入れ」を連想します。世俗と切り離された空間で、己のすべてを捨て去り、武士は刀もはずし、ただ亭主と客というだけの関係の中で茶事が執り行われます。

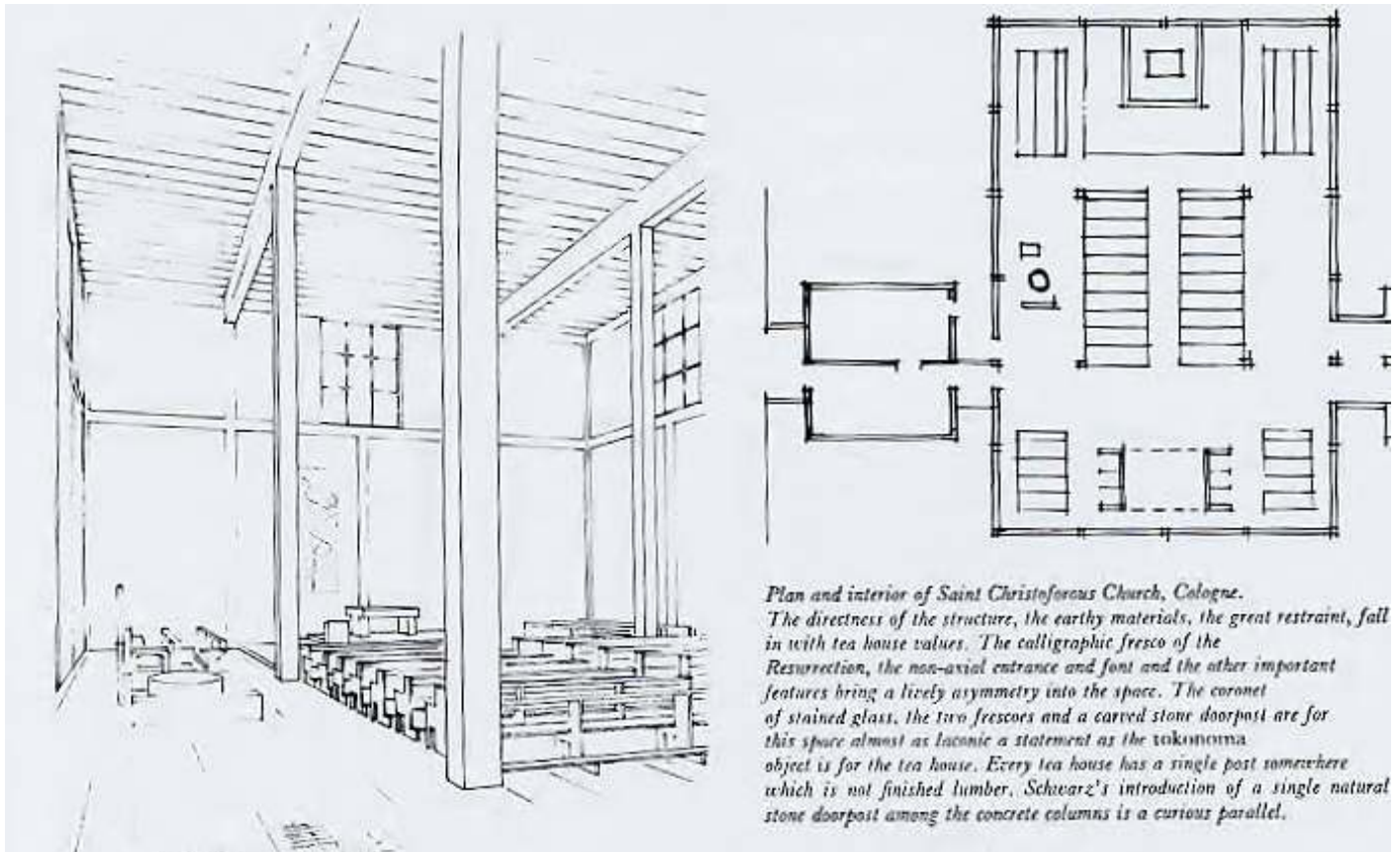
単に茶を飲む行為だけでなく、もっとも深いところでの人間の相互作用、精神の共有、深遠なる美への応答です。そして、一椀の茶をみんなで回し飲みするのは、最後の晚餐を想起し、聖餐式に通じます。

茶室の特徴は、「もてなす」という茶の湯の文化的要素が組み込まれているところです。特に小間の茶室はその究極の空間と思われます。

誰もいなければ単なる空間ですが、そこに人が入り、動きがあり、核を中心に一つの方向に向かい儀式が行われるときに、共に交わる聖なる空間に変わります。

E. A. Sovik 'Tea and Sincerity

アメリカの教会建築の権威であるソーヴィック教授の事務所で学んだ時の資料



※別記 スイスの小さい町で見た教会

シュタイン・アム・ライン プロテスタント教会

訪問日 1999.5.2

